「PHN（思想・人間・自然）」　第３１号　（２０１８年5月号）　(Web版)

【安藤昌益研究の最前線　（その６）】

安藤昌益の真営道医学の継承者である江戸の町医・川村真斎による処方収集書『真斎聚方』〔「雑方之部　名家方選」〕における　『名家方選』三部作　および　山脇東洋〔『東洋先生方函』〕の処方群の「出典」の同定とその考察

――山脇東洋一門と安藤昌益・周伯父子との関係、そして　川村真斎の医学的立場について

和田耕作

（KOSAKU　WADA）

◇　1　はじめに

安藤昌益の真営道医学を継承した川村真斎（1785～1852）による処方収集書『真斎聚方』（内藤記念くすり博物館蔵本）は、浩瀚な著作である。

ここでは、昌益の真営道医学の処方群（本誌「PHN」第30号、参照）が記載されている「雑方之部　名家方選　」（175丁～209丁、ただし以下ではNo.175～209〔見開き２頁の番号〕と表記する）の中のいくつかの処方群について、その「出典」について考証してみよう。

最初に、『名家方選』三部作の中の処方群について、その「出典」を同定し、次に山脇東洋〔『東洋先生方函』〕の処方群についても、その「出典」を同定してみたい。

◇　2　『真斎聚方』「雑方之部」における『名家方選』三部作の処方群について

『真斎聚方』には、「名家方選之部」という見出しが、２７か所ほどある。その「名家方選」という見出しは、「雑方之部　名家方選　」

（No.175～209）が最後となっている。

No.210には「本草之部　附方」の見出しがあり、これが『真斎聚方』の中の最後の見出しである。

『名家方選』の三部作における後半から末尾の部分にかけての大項目の順番は、「癈痼疾」「婦女病」「小児病」「解毒方」「雑集方」の順番となっているが、「雑方之部　名家方選　」の最初の処方群は、『名家方選』における最後の項目である「雑集方」から記載されている。そして、「解毒方」、「癈痼疾」の項目の処方へと遡って記載されていることが、以下の検証から明らかとなった。

・【出典】の確認のための文献一覧〔『名家方選』三部作〕・

・『名家方選』

（山田元倫〔浅井南皐〕維亨撰、中山泰成元吉校、天明元年刊〔一七八一〕、『皇漢医学叢書、第十二冊』〔和田文庫蔵本〕所収による）

浅井南皐（山田元倫、1760～1826）には、他に『名家灸選』（文化二刊〔一八〇五〕）、『黴瘡約言』（享和二年刊〔一八〇二〕）、『養生録』（文化十四年刊〔一八一七〕）などの著書がある。

・『続名家方選』

（村上等順〔名は図基〕編著、文化二年刊〔一八〇五〕、『皇漢医学叢書、第十二冊』〔和田文庫蔵本〕所収による。なお、一部分については、『皇漢医学叢書、第十二冊』に誤植などがあるため、京都大学・富士川文庫本を参照した。）

・『名家方選三編』

（平井主善庸信撰、浅井子顕惟良校、文化四年刊〔一八〇七〕、京都大学図書館・富士川文庫蔵本による）

平井庸信には、他に『続名家灸選』（文化四年刊〔一八〇七〕）、『名家灸選三編』（文化十年刊〔一八一三〕）がある。浅井南皐の『名家灸選』とともに、『名家灸選』の三部作は、「のちの灸治療に影響を及ぼした」（小曽戸洋・天野陽介『針灸の歴史』）という。

◇『真斎聚方』「雑方之部　名家方選　」の処方群（**No.175～No.182**）

における『名家方選』三部作からの処方群について

――その「出典」と考察

▼左段▼　　▼右段▼

〔『真斎聚方』「雑方之部名家方選」の処方名〕　／　【出典】（『名家方選』三部作より）

○　治落架風方（No.175）・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.53）

○　又方　補中益気湯（No.175）

・・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.97）

○　治陰虱方（No.175）「二味」

・・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.99）

○　注舟車宜避方（No.175）「一味」

・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.98）

○　治消渇之神剤　白龍散「四味」

・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.52）

○　治遺溺方（No.175）「三味」

・・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.52）

○　治湯火傷爛方（No.175）「二味」

・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.52）

○　又方　（No.175）「一味」

・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.52）

○　治打撲折傷　鶏鳴散（No.175）「二味」

・・・・『名家方選』「雑集方」（p.52）

○　（又）治打撲金瘡即験奇方（No.175）「十四味」

・・・・・・『続名家方選』「雑集方」（p.102）

・真斎による按文「按此方・・」あり。

○　縛血妙方（No.176）「五味」

・・・・・・『続名家方選』「雑集方」（p.103）

・「根来流ノ血シハリト云」（真斎による）

・「予此参〔人参〕亦用廣東参ト云モノ三七根」（真斎による）

○　同煎薬方（No.176）「五味」

・・・・・・『続名家方選』「雑集方」（p.103）

○　疵薬方（No.176）「三味」

・・・・・・・・『続名家方選』「雑集方」（p.103）

○　治腋下狐臭方（No.176）「四味」

・・・・『名家方選』「雑集方」（p.52）

・真斎による按文「按・・」あり。

○　又方　治腋下狐臭方（No.176）「二味」

・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.97）

○　予製一方（No.176）・・・・〔真斎による腋下狐臭方の処方〕

●【考察１】●

真斎は、『名家方選』・『続名家方選』・『名家方選三編』の三部作の各「雑集方」（各書の末尾の項目）の中から、順不同ですべての内容（薬物名、分量、用法など）をそのまま記載していることがわかる（以下も同様である）。それは単なる転記ではなく、自己の見解〔按文〕を述べるほど、それぞれの処方内容に精通しており、かつ自らの処方〔予製一方（No.176）〕をも創作していることがわかる。

「按文」や「予・・」という文章で、真斎は原文と自分自身の文章とを区別し、誤解が生じないように配慮をしていることがわかる。このような真斎の記載方法は、基本的に真斎の著作における共通点であり、それは、安藤昌益の稿本『自然真営道』を書き下して、「按文」などを追加しているところの『真斎謾筆』にも受け継がれていると考えてよいであろう。

○　治打撲蒸薬（No.176）「五味」

・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.96）

○　治自高墜下乳下痛不可忍者方（No.176）「一味」

・・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.96）

○　治一切折傷金刃傷（No.176）「三味」

・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.96）

○　治風犬傷方（No.176）

・・・・・・・『名家方選三編』「解毒方」（No.95）

○　（又）治風犬傷及鼠咬毒及諸虫咬方（No.176）

・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.95）

○　療狂犬毒再発至危篤者方（No.176）「二味」

・・・・・・『続名家方選』「解毒方」（p.101）

○　治狐詑人方（No.177）「二味」

・・・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.51）

○　療狐詑人如狂乱者方（No.177）「三味」

・・・・・『続名家方選』「雑集方」（p.102）

○　治邪祟方（No.177）「一味」

・・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.51）

・「亨按俗云・・・」〔『名家方選』「雑集方」（p.51）〕

○　又方　（No.177）「一味」

・・・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.51）

●【考察2】●

「亨按俗云・・・」という按文は、『名家方選』の原文にあるものである。すなわち、「亨」とは『名家方選』の編者である「山田元倫維亨」のことである。山田が編集時に付け加えた按文であるから「亨按俗云・・・」とあるのである。

この「按文」については、山崎庸男が安藤昌益の子息「安藤周伯　亨嘉」ではないか、と推論していたが（山崎『安藤昌益の実像』76頁）、それは誤りであることがこのたび確認された。山崎は、『名家方選』の原文を参照しないで論じていたのである。

○　生眉毛奇方（No.177）「一味」

・・・・・・『続名家方選』「雑集方」（No.84）

・本項の「出典」確認は、京都大学・富士川文庫本による。

○　生髪膏（No.177）「四味」

・・・・・・・・『続名家方選』「雑集方」（No.84）

・本項の「出典」確認は、京都大学・富士川文庫本による。

○　断酒方（No.177）・・・・・・・・『続名家方選』「雑集方」（p.102）

○　諸腫物潰方（No.177）「三味」

・・・・・・『続名家方選』「雑集方」（p.102）

○　治疣奇方（No.177）・・・・・・・『続名家方選』「雑集方」（p.102）

○　治瘤方（No.177）「三味」

・・・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.98）

○　治骨硬不下咽方（No.177）「二味」

・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.97）

○　又方（No.177）「一味」

・・・・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.98）

○　又方（No.177）「一味」

・・・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.98）

●【考察3】●

以上は、主にそれぞれの書の「雑集方」からの記載である。

○　解魚毒方（No.177）「一味」

・・・・・・・・『名家方選』「解毒方」（p.48）

○　解食蕈中毒欲死者方（No.177）「二味」

・・・・・『名家方選』「解毒方」（p.48）

○　解河漏毒方（No.177）「一味」

・・・・・『名家方選』「解毒方」（p.48）

○　下水銀方（No.177）「二味」

・・・・・・『名家方選』「解毒方」（p.48）

○　解河豚毒方（No.177）「一味」

・・・・・・『名家方選』「解毒方」（p.48）

・文末に「烏薇苺也」〔うれんぼナリ〕との真斎による注あり。

○　解酒毒方（No.177）「三味」

・・・・・・『名家方選』「解毒方」（p.49）

○　解河豚魚毒方（No.177）「一味」

・・・・・『続名家方選』「解毒方」（p.100）

○　解章魚毒方（No.177）「一味」

・・・・・『続名家方選』「解毒方」（p.100）

○　解竹筍毒方（No.178）「二味」

・・・・・『続名家方選』「解毒方」（p.101）

○　解中漆毒者方（No.178）・・・・『名家方選』「解毒方」（p.49）

○　又方　（No.178）「一味」

・・・・・・・『名家方選』「解毒方」（p.50）

○　治漆瘡方（No.178）「一味」

・・・・・『続名家方選』「解毒方」（p.101）

○　解生漆毒方（No.178）「二味」

・・・・・『続名家方選』「解毒方」（p.101）

○　治服軽粉剤口中腐爛者方（No.178）「三味」

・・・・『名家方選』（「解毒方」p.49）

○　又方　（No.178）「一味」

・・・・・・・『名家方選』（「解毒方」p.49）

・「予療黴毒・・・」・・・・（真斎による文あり）

○　解粉毒方（No.178）「二味」

・・・・・『続名家方選』「解毒方」（p.101）

○　治霜雪傷方（No.178）・・・・・『続名家方選』「解毒方」（p.101）

○　解魚毒方（No.178）「一味」

・・・・・『名家方選三編』「解毒方」（No.93）

○　解河豚毒方（No.178）「一味」

・・・・・『名家方選三編』「解毒方」（No.93）

○　又方　（No.178）「一味」

・・・・・『名家方選三編』「解毒方」（No.94）

○　解酒毒方（No.178）「一味」

・・・・・『名家方選三編』「解毒方」（No.94）

・「予解毒・・・此方奇々」・・・（真斎による文あり）

○　治狂犬咬傷毒方（No.178）「三味」

・・・・・『名家方選』「解毒方」（p.49）

○　抜竹木入肉方（No.178）「二味」

・・・・『名家方選』「解毒方」（p.49）

○　神通湯（No.178）「十二味」

・・・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.50）

○　金屑丸（No.178）「四味」

・・・・・『続名家方選』「解毒方」（p.100）

○　治消渇欲飲水甚者（No.178）「一味」

・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.97）

○　救溺死方（No.178）「一味」

・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.97）

○　治破傷風反張或発諸悪症者〔方〕（No.178）「三味」

・・・・・・『名家方選三編』「雑集方」（No.96）

○　治蝮蛇咬方（No.179）「六味」

・・・・・『名家方選三編』「解毒方」（No.94）

○　又方　（No.179）「一味」

・・・・・『名家方選三編』「解毒方」（No.94）

●【考察４】●

以上は、主にそれぞれの書の「解毒方」からの記載である。「雑集方」からのものもある。これで『名家方選』の三著作の「解毒方」「雑集方」のほとんどの処方を、真斎は原文に忠実に収集・記載していることがわかる。『名家方選』の三著作では、項目の順番は「解毒方」「雑集方」の順であるが、真斎は最初に「雑集方」の項目から収集しているのは、前出の見出し「雑方之部　名家方選　」に一致している。

ここで、真斎の原文は改頁となっているが、まだ三件ほど「雑集方」からの処方群が続き、その後「癲癇」などの項からの記載となる。

○　治癲癇方（No.179）・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.50）

○　鉄朱散（No.179）「七味」

・・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.51）

○　療癲癇方（No.179）「二味」

・・・・・『名家方選』「雑集方」（p.51）

○　療〔治〕癲癇方（No.179）「二味」

・・・・・『名家方選三編』「癲癇」（No.71）

○　又方　（No.180）・・・・『名家方選三編』「癲癇」（No.71）

○　又方　（No.180）「四味」

・・・・・『名家方選三編』「癲癇」（No.71）

○　失心丸（No.180）「四味」

・・・・・・『続名家方選』「癲癇」（p.91）

○　奇効丸（No.180）「八味」

・・・・・・『続名家方選』「癲癇」（p.91）

○　秘伝反魂丹（No.180）「十九味」

・・・・・『続名家方選』「癲癇」（p.91）

○　治癲癇奇剤二方（No.180）「七味」

・・・・・『続名家方選』「癲癇」（p.92）

○　次下虫丸薬方（No.181）「四味」

・・・・・『続名家方選』「癲癇」（p.92）

○　醒心茯苓丸（No.181）「四味」

・・・・・『続名家方選』「癲癇」（p.92）

○「治陽狂苦参一味糊丸・・・」（No.181）

・・・・・〔この一文は真斎によるものか？　「出典」不明〕

○　療白癜風方（No.181）「三味」

・・・・・『名家方選』「癜風」（p.32）

○　療赤白癜風方（No.181）「四味」

・・・・・『名家方選』「癜風」（p.32）

○　治赤白癜風経年難愈者方（No.181）「四味」

・・・・・『名家方選』「癜風」（p.32）

○　治癜風方（No.181）「二味」

・・・・・・『名家方選三編』「癜風」（No.69）

○　又方　（No.181）「四味」

・・・・・・『名家方選三編』「癜風」（No.69）

○　又方　（No.181）「一味」

・・・・・・『名家方選三編』「癜風」（No.70）

○　又方　（No.181）「一味」

・・・・・・『名家方選三編』「癜風」（No.70）

○　療赤白癜風方（No.181）「三味」

・・・・・『続名家方選』「癜風」（p.90）

○　又方　（No.181）「三味」

・・・・・・『続名家方選』「癜風」（p.91）

○（癩疾之一方）皂角散（No.181）「三味」

・・・・『名家方選三編』「癩疾」（No.70）

○　又方　（No.181）「三味」

・・・・・『名家方選三編』「癩疾」（No.70）

○　又方　（No.181）「八味」

・・・・・『名家方選三編』「癩疾」（No.71）

○　一方　（No.181）「四味」・・・・・「真斎による追加の処方」

・「此方原出上田家也。家君伝之。」（真斎による文）

・家君とは、真斎の父・川村寿庵のこと。上田家とは、寿庵の師・上田永久家。

○　治癩病方（No.181）「七味」

・・・・・『続名家方選』「癩病」（p.92）

・「図基按・・」の文は、原文にある村上等順の按文。

・「図基」（のりもと）とは、『続名家方選』の編者・村上等順の名である。

・「按此方白旦最妙也」・・・（真斎による按文）

○　治癩瘡潰爛方（No.182）・・・・・『続名家方選』「癩病」（No.69）

・本項の「出典」確認は、京都大学・富士川文庫本による。

○　治癩瘡腐爛甚者方（No.182）「二味」

・・・・・・『続名家方選』「癩病」（No.69）

・本項の「出典」確認は、京都大学・富士川文庫本による。

○　治癩瘡愈後血色穢悪方（No.182）「二味」

・・・・・『続名家方選』「癩病」（p.93）

●【考察5】●

「雑集方」から、「癈痼疾」の中の小項目「癜風」「癲癇」「癩病」などへと進めているが、真斎は、「癲癇」「癜風」「癩疾」「癩病」と、その順番については臨機応変である。『名家方選』の三著作での大項目の順番は、「癈痼疾」「婦女病」「小児病」「解毒方」「雑集方」となっている。

この後も、『名家方選』の三著作からの記載が延々と続くが、ここでいったん「結び」として、次の課題へと進みたいと思う。

『名家方選』の三著作と真斎との関係についての考察は、以上の考証のみで、安易に結論を急いではならないが、真斎の記載方法の一端については、それを見ることができたのではないかと思う。もちろん、今後のさらなる追究が必要であることは言うまでもないことである。

◇ 3 『真斎聚方』における山脇東洋〔『東洋先生方函』〕
の処方群について
――その出典の「同定」と考察

次に、『真斎聚方』のNo.188から始まり、先に紹介した安藤昌益の処方群を挟むように断続的に（No.208からは集中的に）出ているところの、山脇東洋（1706～1762）〔『東洋先生方函』〕の処方群について、その出典を確認してみよう。

・【出典】の確認のための文献一覧・

・『東洋先生方函』（寛政十二年〔1800〕、林敬三郎益謙写本、和田文庫蔵本）
〔参照資料＝『養寿院経験方』（写本、京大・富士川文庫蔵本）、『山脇東洋・吉益東洞　経験方』（写本、京大・富士川文庫蔵本）〕

・『方函』（内題「養寿院方函」、文化十三年〔1816〕刊本、和田文庫蔵本）

▼左段▼　　▼右段▼
〔『真斎聚方』「雑方之部名家方選」の処方名〕　／【出典】（『東洋先生方函』）
／　〈・〔　〕内は、原出典〉

○ 東洋治痞瀉心丸（No.188）・・・・・・・瀉心丸方　二十八
〔傷寒論〕「二味」　〔刊本になし〕
○ 同　三黄丸（No.188）・・・・・・・・・三黄丸方　二十九
〔金匱要略〕「三味」　〔刊本になし〕
○ 東洋治黴軽粉剤方（No.188）・・・・・軽粉剤方　三十三
〔佐井定策方〕「四味」　（刊本、軽粉剤　三十二）
○ 東洋六物解毒湯（No.188）・・・・六物解毒湯方　三十三
〔東洋先生方〕「六味」　（刊本、六物解毒湯　三十三）
○ 東洋用方治癩風（No.188）・・・・・・浮萍散方　五十五

〔儒門事親、浮萍散〕「五＋二味」　（刊本、浮萍散　五十三）

○　東洋療気脱方（No.189）・・・・・・・・産後気脱方　百三十

〔刊本になし〕

○　東洋用方三白散（No.189）・・・・・・・・三白散方　六十七

〔平田仙道方、香月牛山活套方〕「三味」

（刊本、三白散　七十二）

○　東洋用方金竜丹（No.189）・・・・・・・金竜丹方　五十七

〔養寿院方〕「六味」　（刊本、金竜丹　五十五）

○　東洋赤小豆湯（No.189）・・・・・・・赤小豆湯方　四十六

〔東洋先生方〕「七味」　（刊本、赤小豆湯　四十二）

○　東洋琥珀湯（No.190）・・・・・・・・・琥珀湯方　四十五

〔東洋先生方〕「五＋二味」　（刊本、琥珀湯　四十一）

○　東洋再造散（No.190）・・・・・・・・・・再造散方　十四

〔明・龔廷賢方〕「五味」　（刊本、再造散　十四）

○　東洋用方療疥瘡薬湯（No.190）・・・・療疥瘡薬湯方　六十二

〔長瀬立英氏授〕「四味」　（刊本、療疥瘡薬湯方　六十）

○　又方　（No.190）・・・・・・・・・・・・　又方　六十三

〔長瀬立英氏授〕「四味」　（刊本、又方　六十一）

○　東洋即功丸（No.190）・・・・・・・・・・即功丸方　四十

〔養寿院方〕「四味」　（刊本、即功丸　四十）

○　大檳榔湯（No.190）・・・・・・・・・・檳榔紫蘇湯方　十七

〔外台秘要〕「六味」　（刊本、檳榔紫蘇湯　十七）

○　小檳榔湯（No.190）・・・・・・・・・・・・檳榔湯方　十二

〔外台秘要〕「六味」　（刊本、檳榔湯　十三）

○　東洋用方紫蘇子湯（No.190）・・・・・・紫蘇子湯　九十四

〔千金方〕「十味」　〔刊本になし〕

○　東洋三物金鈴丸（No.191）・・・・・三物金鈴丸方　二十六

〔養寿院方〕「三味」　（刊本、三物金鈴丸　二十六）

○　東洋産後百日間不乳者（No.192）・・・・・醸乳丸　百十一

〔熊野玄宿方〕「三味」　〔刊本になし〕

○　東洋療楊梅瘡反鼻散方（No.192）・・・・反鼻散方　七十一

〔饔庭太仲方〕「六味」　（刊本、反鼻散　九十）

○　東洋用方治疳虫疳眼方（No.192）・・・・

「四味」　治小児疳虫疳眼方　百四

〔刊本になし〕

○　東洋耆当姜●〔クサカンムリに浸〕湯（No.192）・・・・

黄耆当帰生姜人参湯方　四十二

〔東洋先生方〕「四味」　　（刊本、黄耆当帰生姜人参湯）

○　東洋用方甘連湯（No.192）・・・・・・・・甘連湯方　八十

〔東洋先生方〕「四味」　　（刊本、甘連湯　百二十六）

○　東洋療嘔吐不止或暴瀉急後方（No.193）・・・・・

療嘔吐不止或暴瀉急後方者方　七十二

〔東洋先生方〕（刊本、療嘔吐不止或暴瀉急後方者方　九十五）

○　東洋鷓胡菜湯（No.193）・・・・・・・・・鷓胡菜湯方　五

〔養寿院方〕「四味」　　（刊本、鷓鴣菜湯　五）

・「予用梹青」・・・・・〔真斎による〕

○　同　殺虫丸（No.193）・・・・・・・・・・殺虫丸方　二十七

〔養寿院方〕「二味」　　（刊本、殺虫丸　二十七）

○　東洋用方檳榔散（No.193）・・・・・・檳榔散方　百四十四

〔外台秘要〕「五味」　　〔刊本になし〕

・「右五味・・」以下の解説文は、原文と異なっている。

▼〔・「檳榔散」の次の処方「古今医統一方　一曰育気湯」（No.194）

には、「家君曰反胃・・・」「家君曰、此方治一切之久病飲食絶

気急者、予数用之救数百人真方也」と、真斎による文がある。「家君」とは、川村寿庵〔錦城〕であり、「予」とは真斎である。「家君曰反胃・・・」の文章は、『錦城先生経験方』（内藤記念くすり博物館蔵）の十七丁に出ている文章の内容を真斎が書いたものである。〕▼

○　東洋用方療齲歯方（No.195）・・・・療齲歯方　五十

〔播州赤穂・川端玄昌方〕　　（刊本、四十八）

○　東洋用方（No.195）・・・・・・・・・南星散方　五十二

〔阿波・橋本柳伯方〕「四味」　　（刊本、南星散　五十）

○　同用方　（No.195）・・・・・・・研摩癜風方　五十八

〔中村如春方〕「三味」　　（刊本、摩癜風方　五十六）

▼〔・この後、No.196からNo.198に安藤昌益の処方群がある。

本誌「PHN」第30号、拙論を参照。〕▼

○　東洋用方華蛇散（No.199）・・・・・花蛇散方　六十八

〔王氏手集〕「二味」　　（刊本、托痘白花蛇散　八十七）

○　丁腫東洋用方（No.207）・・・・治疔瘡疼痛方　五十九

〔長瀬立英方〕「二味」　　（刊本、五十七）

○　東洋用方療癩風（No.207）・・・・大風子丸方　百一

〔長藩大夫大江豊西君家方〕「十一味」　　〔刊本になし〕

○　東洋骨硬方（No.208）・・・・・・・療骨硬方　四十八

〔東洋先生方〕「一味」　　（刊本、四十五）

○　又方　（No.208）・・・・・・・・・又方　四十九

〔越前・田代万貞授〕　　（刊本、四十六）

○　洗眼散（No.208）・・・・・・・・・洗眼散方　六十一

〔養寿院方〕「二味」　　（刊本、洗眼散　五十九）

・文末の「成美堂・・・」は、原文のものである。

○　治胸腹痛帖薬之方（No.208）・・・・〔左に同じ〕　百三

「七味」　　〔刊本になし〕

○　洗肝湯（No.208）・・・・・・・・・・・・洗肝湯方　百七

「八味」　　〔刊本になし〕

○　沈香解毒散（No.208）・・・・・・・・沈香解毒散方　百九

「四味」　　〔刊本になし〕

・「即伯州散也」・・・真斎の文である。

○　治黴毒（No.208）・・・・・・・・・・・・治黴毒方　百十

「四味」　　〔刊本になし〕

○　痘疹差後余毒腫痛方（No.208）・・・〔左に同じ〕　百三十三

〔刊本になし〕

○　如聖丸「直訣」（No.208）・・・・・・・・如聖丸方　百三十八

「六味」　　〔刊本になし〕

・原出典の「直訣」とは、『小児薬證直訣』（宋、錢乙）のこと。

○　古今録験白頭翁湯（No.208）・・・・

古今録験白頭翁湯方　百四十一

「七味」　　〔刊本になし〕

○　温胆湯「千金」（No.208）・・・・温胆湯方　百四十二

「六味」　　〔刊本になし〕

・原出典は、『千金方』である。

○　療小児・・・馬明湯方（No.209）・・馬明湯方　百五十四

「四味」　　〔刊本になし〕

・「一方・・。按・・」・・・真斎の按文あり。

○　子宮不収者（No.209）・・・・・子宮不収者方　百三十一

〔刊本になし〕

・ここで真斎は、「以上　東洋用方也」と結んでいる。

それは、「以上　真営堂方也」（No.197）と結んだのと

同様の書き方である。

▼【本草之部　附方】（No.210～）・・・・・

〔『真斎聚方』にある最後の見出しである〕▼

◎　一方　「東洋」治乳岩・・・（No.295）

・・・《出典は、東洋の処方とあるが、現在のところ不明である。》

〔刊本になし〕

●【考察６】●

山脇東洋の『方函』（内題は、「養寿院方函」）には、文化十三年の刊本もあるが、それ以前に多数の写本が作成されて、多くの門人たちなどに広く用いられていたものである。

このたび刊本『方函』（内題は、「養寿院方函」、「本編」＝百三十八処方、「付録」＝七十七処方、和田文庫蔵）と照合したところ、そこには見当たらない処方名が多数あった。本稿では『東洋先生方函』（写本、和田文庫蔵）を中心に同定し、かつ刊本『方函』（和田文庫蔵）をも参照した。

この『東洋先生方函』（写本、和田文庫蔵）には、真斎が記載しているほとんどの処方がみられることから、真斎もまた『東洋先生方函』の類似写本からその処方群を記載しているものとみられる。ちなみに、『東洋先生方函』（写本、和田文庫蔵）には、百七十三の処方群が収載されている。ただし、番号の「三十三」がダブリで二つある。

また、東洋の『方函』は、『養寿院経験方』『養寿院方函』などの書名でも、多くの写本類が残されている。その一つである京都大学図書館富士川文庫の『養寿院経験方』の写本には、百七十二の処方群が収載されている。

◇　４　山脇東洋一門と安藤昌益・周伯父子との関係、

そして　川村真斎の医学的立場について

――結びにかえて

山脇東洋（1706～1762）は、古方派とされ、または『蔵志』の著者として知られているが、『東洋先生方函』（和田文庫蔵）および『養寿院経験方』（京都大学富士川文庫蔵）の巻頭には、

「　孫思邈　千金方

王壽〔燾〕　外台秘要方

晩近諸家方

草間陋巷経験方　」

とあり（この四行の前文は、刊本には記載されていない）、古方派という視点からのみ、山脇東洋一門の医学を見てはならないように思われる。なぜなら、東洋の処方群には、古方的な処方群〔七味以下の処方が多い〕のみならず後世方的な処方群〔八味以上の処方が多い〕も含まれており、かつ有名とは思われない医師たちの「諸家方」や「経験方」なども多いからである。ちなみに、『東洋先生方函』（和田文庫蔵）には、一般的に「多味」と言われる八味以上の処方〔後世方的処方〕が二十三処方（23／173＝0.13）もある。しかし、上記にみる通り、真斎が記載している東洋の処方群のほとんどは、「八味」以下の処方が多い。これは、真斎の医学的基盤が主に古医方にあったからであろうか。

一方、刊本『方函』では、八味以上の処方は、「本編」では十三処方

（13／138＝0.09）である。「付録」では、十九処方（19／77＝0.24）あり、刊本の全体では、三十二処方（32／215＝0.15）である。全体での比率にはそう大きな変化はないものの、「本編」のみでの比率が少しく低いようにも思われる。これは、おそらく刊本を編集した時点における医学界の趨勢と編者の編輯方針の反映であろう。

私としては、刊本よりも写本の『東洋先生方函』の方が、東洋の処方の実際を反映しているように思える。また、その内容的な価値は刊本よりも高いように感じている。

昌益の子息・周伯が、山脇東洋の子・東門（1736～1782）に入門したことについては、「わが子に背かれた昌益」（安永寿延『写真集・人間安藤昌益』）という見解があったが、それは明らかな誤りである。

安藤周伯は、山脇東洋一門の解剖学を重視するという医学的な進取性と実証的精神とともに、その東洋医学への幅の広い目配りと広汎でかつ確かな医学的基盤〔山脇東洋は王燾『外台秘要』を延享三年〔1746〕に覆刊している（小曽戸洋『中国医学古典と日本』）。〕を認識していたのではないだろうか。山脇東門もまた、解剖を行い、「吐方」や「刺絡」の術を実施している。その医学的進取性は、父・東洋にも引けを取らないものであった。その東門の門人として安藤周伯が、『東洋先生方函』からも学んでいた可能性は十二分にある。

『真斎聚方』において、真斎が安藤昌益の処方群と山脇東洋の処方群の多くを、隣り合わせ的に記載していることは、とても偶然事とは思われないのである。そこには意味深い関連性があるのではないだろうか。そして、真斎の父・寿庵が師・上田永久から受け継いだ処方群と、「家君」（寿庵）の処方についても、真斎がこと細かに記載しているのもまた偶然ではないのである。真斎にとって『真斎聚方』は、単なる処方群の収集、寄せ集めの書ではなく、その永年の臨床医家としての力量と、その医学的バックボーンを披瀝する場にほかならなかったのである。

『真斎聚方』には、『外台秘要』からの処方が多く記載されているが、一方で『万病回春』などいわゆる後世方の医書群からの記載も多く見られる。真斎の医学的立場は、真に臨床医学に寄与するかどうかという極めて実際的な基準で、その医学的内容を吸収していったのではないだろうか。

『真斎聚方』には、古医方・後世方を問わず、膨大な医書群からの記載がみられることは、その医学的立場の現れにほかならないであろう。真斎の時代は、吉益東洞流の古医方と江戸医学館を中心とした考証学派の隆盛の時代であった。真斎は、その古医方と考証医学とを基盤としつつも、それに偏しない幅広い視野を持った臨床医家であった。その医学的立場は、膨大な処方群を渉猟して、昌益の「安肝湯」を伝えたところの折衷派の巨星・浅田宗伯（1815～1894）の方法論に近似しているように思われる。

昌益の臨床医学は、『万病回春』などの影響を受けて後世方的ではあるが、独創的な処方ばかりである。真斎はそれらの後世方的な独創的な処方群をも評価できる力量と技量とを有していた数少ない臨床医家であった。その医学的位相は、父・寿庵の蘭学者たちとの交遊に見られる寛容的な姿勢を受け継いでいるものといえるであろう。

『真斎聚方』において真斎は、安藤昌益の処方群と山脇東洋の処方群の記載の前後などに、いくつかの「蘭方」の処方群を記載している。その処方群の出典の同定は重要な仕事であるが、それは今後の課題である。私はすでに真斎の父・川村寿庵と蘭学者・杉田玄白らとの交遊関係などについて、詳しく見てきた（本誌『PHN』第29号、拙論参照）。その寿庵の子・真斎が「蘭方」の処方群を取り入れていることにも、十分な必然性があったと言えるのである。

こうして見て来ると、真斎の医学的立場は、さらに「和漢蘭」医学の折衷派的・融合論的な視点からも考察されるべきであろうと思われるのである。

〔2018年5月25日、PHN（思想・人間・自然）、第31号、ＰＨＮの会発行〕

〔2018年5月25日、和田耕作（Ｃ）、無断転載厳禁〕